研究テーマ　　内服動作向上のための運動プログラム導入の報告

病　院　名　　医療法人社団健育会 ねりま健育会病院

研　究　者　　○塩飽悠介(しわく ゆうすけ)(看護師)　土屋光平(看護師)　草薙樹(看護師)
清野直樹(看護師)　伊藤憲次(看護師)

概　　要

【研究背景】
回復期リハビリテーション病棟(以下、回復期リハ病棟)は自宅や社会に復帰することが目的である。内服自己管理導入基準に従って内服自己管理を実施している現状にあるが患者が何らかの形で内服薬を床に落下させてしまう(以下、落下薬)インシデントが多発している。正確な内服を続けるためには内服薬の必要性の理解に加えて、内服袋を開ける、内服薬を口の中まで正確に入れる、飲み込むといった一連の動作が成立しなければならない。2020年度の当院の落下薬調査研究では、手先の細かい動きよりも、上肢の粗大な運動に関連がある事が示唆されており、身体機能に着目した介入が、内服のインシデントの軽減に有益である可能性が推察された。上肢の粗大な動きを鍛えることによって内服インシデントの軽減ができないか考えた。
入院生活では、一つ一つの動作をリハビリと捉えることができると考え、上肢の運動に対して、 継続可能な生活動作はないか模索、検討をした。
【研究目的】
本研究の運動プログラムを導入することによって、落下薬件数に影響が出るか、内服動作の精度を上げられるかを研究目的とした。
【研究方法】
N病院回復期リハビリテーション病棟に
2021年4月～2021年9月に入院していた患者
①A病棟:本研究の運動プログラムを導入
②B病棟:本研究の運動プログラム非導入
歯ブラシのブラッシング動作において手首の屈曲、底屈、回内、2分程度の歯磨き動画を作成し入院患者へ指導。
分析方法:入院時退院時データの改善点に対し、差を求め、t検定。有意水準は$P<0.05$を有意差ありとした。
倫理的配慮：N病院倫理委員会の承認を得た。
【結果】
対象患者は全体で82名であり、運動プログラムの非介入群38名、介入群44名。
各項目において有意差のある項目は顕著に表れなかった。
【考察】
運動プログラム導入を全患者に対して介入とした。導入、運動の継続をすること、経過を追うことが困難。十分に歯磨き体操をできていなかった。受け入れが不良で指導しても元のやり方に戻ってしまう。
動画視聴による指導を病棟全体で行うことが適切でなかった。
患者の理解度によって個別性にあわせた指導が必要。指導内容がわかりにくかった。どうすればわかりやすく伝わり、実践してもらえるかが課題。自立患者の歯磨きのタイミングが合わず指導不十分、実施確認できなかった。入院して1週間程度、短期集中的に指導・評価を行い、患者の選定をしてもよかった。
→ある程度指導の定着ができたと評価できたら、以降は定期的な指導内容の確認等を行うなどの入院から退院までの指導計画が必要。
【結論】
自主トレーニングの効果を得るためには、定期的なモニタリングや介入時間が必要。
患者の受け入れ状況、継続可能なのか評価をするマンパワーや指導の統一性が必要。
【参考文献】
真栄里久美子他:内服自己管理患者における今後の課題,2019
増田愛梨他:内服自己管理の患者に対する看護師の服薬指導の実態,2018
芦川直也,他 ミニメンタルステート検査(MMSE)に基づいた認知機能評価と服薬管理方法との関連性の検討 2017
光岡明子,他 高齢の慢性心不全患者の自己管理に関連した文献検討 人間看護学研究 13:81-91 2015
濱田莉加,他 自己管理可能と判断された患者の内服管理の現状-内服指導の重要性-日本看護学会論文集(成人看護Ⅱ)41:144-147,2010